昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十二年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二一五号）

慈光

第十九巻　第四号

目次

『歎異鈔』の枝折り……近角常観……(1)
愛書と求道……福島政雄……(8)
かぎりなきみ仏の慈悲……和才誠司……(12)
信味断片……佐藤強三郎……(16)
教えられることども……花田正夫……(19)

63.11.20
父上、穆郎
母上
たく

『歎異鈔』の枝折

近角常観

池山兄が意訳歎異鈔の初稿を書き上げられた時（大正九年）直に私に示して意見を求められた。然るに愚図々々して手を着けぬ間に、遂に出版校正の運びになった。そこで同信の親友として、さきに独訳歎異鈔の序を書いた私は、是非とも再び意訳歎異鈔に何か書かねばなるまい、との督促を兄よりうけて辞退する余地がない。止むなく直に筆を採って所感のままを書きつける。

熟々意訳歎異鈔を読みもていく時は、歴々として非常なる苦心参澹のあとが見える。そは忠実に本文を逐語訳にして、原文の意義を増減せざらん事の努力と、専門的仏語の解釈と注脚とを文中に入れこんで、了解を安くせんとの用意である。これやがて兄の温潤含蓄なる徳操と、慈愛親切なる人格の表現である。この点に於いては意訳歎異鈔は独訳歎異鈔と同じく、たしかに兄が歎異鈔の心読体読の発露であらねばならぬ。

併し私は未だ此度の意訳について、直接兄の述懐を親しく承る機会を得ぬが、独訳が逐語訳たるにもかかわらず、意義の明瞭と原文の風調を失わざりしと、解釈及び注脚を本文より別立して語勢の冗漫を避けたるに比較して、意訳が現代語を用いながら頗る不利益なる立場にあることを御察しする。むしろ全然信仰の見地より思い切り意訳して、本文の意味を痛快に徹底せしめ、解釈及び注脚を切り離して原文の簡潔と跌宕とを写すことに勉めてはいかが。勿論この方法は本文多含の意義をそこない、信仰的見解を局限するの非難はまぬかれぬであろう。

即ち今咄嗟の場合、とても本文の調子を写すことは出来ぬが、幾分か意味を通暢ならしむるために、私は読みもていく中に試みに次の如く書きつけて見た。温厚なる兄は或は寛宏の雅量をもって迎えらるるか知らぬが、かえって大方の読者より完璧を傷くるの叱責を蒙るであろう。これまた人倫の弄言を恥じざる無漸無愧の私の自己の暴露であるが、他日再版の参考ともならば幸甚である。

大正九年五月十五日。

第一章

悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに。

どのように悪いとても心配するに及ばぬ、弥陀の本願をあきれさし、負かして仕舞うほどの悪はないから（かえって悪が本願に負けて、あやまりはて、御慈悲の広大なるにあきれて、不思議と信ずるの外はない）

第二章

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。

親鸞自身は御慈悲の念仏ばかりで阿弥陀仏が助けて下さるぞよとの善知識の仰せを承ってそのまま信じいただくほかになんにもない。

第三章

他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。

他力をたのみたてまつりて、悪人が悪人と分ったところが、正しくたすかる因である。

第四章

浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて大慈大悲をもておもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり……しかれば念仏もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々。

浄土の慈悲というは、先ず自分が御慈悲の念仏をいただきて、命終り次第、早速仏になりて、大慈大悲心があらわれて、思い存分衆生済度が出来るのをいうのである。……しかれば御慈悲の念仏をいただくことばかりが末通りたる大慈悲である。

第五章

いずれもいずれもこの順次生に仏になりてたすけそうろうべきなり。

いずれもいずれもこの次の生で自分が仏になって見れば自由自在に助けることが出来るのである。

第六章

自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり。

まことの御慈悲がいただけたならば、師匠じゃ弟子じゃ

と争わずとも、自然のことわりにかないて仏の御恩もわかり師匠の御恩もわかるようになるのである。

第九章

仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよいよたのもしくおぼゆるなり。

仏は前もって御見抜きなされて、煩悩具足の凡夫を助けると仰せられたのであってみれば、他力の悲願は、なるほど（煩悩のために押えられて喜べぬ）こうした我等のためであるわいと会得されていよいよたのもしくおもわれるのである。

（参考）結文、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。

第十章

念仏には義なきをもて義とす、不可称不可説不可思議のゆえにとおおせそうらいき……、上人のおおせにあらざる異義どもを近来はおおく仰せられおうてそうろうよしつたえうけたまわる……。

念仏には行者の左右の義をはなれたところが、そのまま如来の御はからいである。何となれば、なんともかとも称ることも、説くことも、心に思いはかろうことも出来ぬ広大な御慈悲であるからと聖人は仰せられた。……それを伝えられた上人の仰せにない間違った義の種々を近来は多く言い合うて居らるるよしを伝聞する……。

第十一章

信ぜざれども辺地懈慢疑城胎宮にも往生して果遂の願のゆえについに報土に生ずるは名号不思議のちからなり。これすなわち誓願不思議のゆえなればただひとつなるべし。

不思議を信ぜずして、疑いながらも念仏すれば辺地懈慢疑城胎宮にも往生して、飽くまで御見捨なき御慈悲を以て自然に疑を晴らして果たし遂げて助けねばならぬという誓願の御力で遂に真実報土に往生することの出来るのは、畢竟疑いながらも称うる名号の不思議の力というもので、直に是れ即ち誓願不思議のいたす所なれば結局誓願不思議名号不思議は同一と言わねばならぬ。

第十二章

経釈のゆくち

経釈のゆきみち即ち行路。

またひとありてそしるにて仏説まことなりけりとしられそうろう。しかれば往生はいよ〳〵一定とおもいたまうべきなり。

又人ありて誹謗するので、釈尊が経文に誹謗正法と説かれたことが真実正確であったわいと知られるであろう。

此くの如く仏語に虚妄なきことが分って見れば我等が往生も仏の仰の通り間違なきゆえいよ〳〵一定といただけるではないか。

第十三章

弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざるは、また本願ぼこりとて往生かなうべからずということ、この条本願をうたがう善悪の宿業をこころえざるなり。

弥陀の本願は不思議にあらせられるゆえに悪を心配するに及ばぬというは（まことの正しき信心にて如何なる悪も本願をあきれさし、負かすことの出来ぬ御不思議の力強さをいただけたる有様なるを言い枉げて）是もまた本願に心安だて過ぎた間違いというもので到底たすからぬと斥けるものがあるが、この申分は本願（の不思議）を疑うもので（結局悪を止めよといえば止められるように考えておるは）善悪の所作は過去の宿業より来るもので一分一厘も動かすことの出来ぬということを知らぬからだ。

これにてしるべし。なにごともこころにまかせたることならば往生のために千人ころせといわんにすなわちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこころのよくてころさぬにはあらず。

また害せじとおもうとも百人千人をころすこともあるべしとおおせのそうらいしはわれらがこころのよきをばよしとおもいあしきことをばあしとおもいて本願の不思議にてたすけたまうということをしらざることをおおせのそうらいしなり。

「是で分かるではないか、何事も心の思うままに自由に行えるものならば、たすかるために千人殺せというたら殺せそうなものである。されど一人にても殺すべき業縁がないから殺せないのである。自分の心が善いから人を殺すというような悪事をせないのじゃと思うたならば大間違である。それ故また自分では殺さないようにと思えども、業があれば百人千人を殺すこともあるかもしれぬ。

と仰せられたのは我等の心の善きをば宿業とは思わず、我善を作せりと得意がりて、善のために助かるように思い、又我等の心の悪しきをば宿業とは思わず、我悪を為せりと屈托して悪のために助からぬように思うて、善きも悪しきも業報のために如何ともすべからざる我等を憐れみたまう本願の不思議にて助けて下さるのであるということを知らざることを、御諭し下されたのである。

願にほこりてつくらん罪も、宿業のもよおすゆえなり。願にほこりて罪をつくるならば、やはり其のほこりて作るということが宿業のために催さるるのである。本願にほこるこころのあらんにつけてこそ他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてそうらえ。

本願にほこるこころのあるようなものなればこそ、それをかねてしろしめして御見捨なき他力をたのむ信心も決定出来るのではないか。

（参考）第九章。これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じそうらえ。

第十四章

一念発起するとき金剛の信心をたまわりぬればすでに定聚のくらいにおさめしめたまいて命終すれば、もろもろの煩悩悪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり。

一念発起して御慈悲がいただけたとき、金剛堅固の信心をたまわりたのであれば、はやすでに、正定聚の位に摂めとりて下さって、娑婆のおわり臨終になったのであれば、其の一念に、ありとあらゆる煩悩悪障をそのまま転じかえて生死の絆をたちて、無生忍即ち無生のさとりを開くべき認定を得たる資格を与えて下さるのである。

「命終すれば」の一句を決して下につけて読むべからず。

抑々平生の時善知識の言の下に帰命の一念を発得したる時下品下生の臨終を実現したるものなり。是聖人が信の一念に前念命終後念即生を談じたまう所以なり。髓って無生忍とは正定聚不退転なり。無上涅槃ならば無生之生若しくは無生位というべし。無生忍とは言わざるなり。

第十六章

日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ廻心とはもうしそうらえ。

日常如来の本願他力のまことの教を知らなんだ人が、弥陀の仏智不思議に夜があけて、信心の智慧をたまわりて今迄のように自分で善を励みて助かろうという心得方では、とても御助けにあずかることは叶わないと思い知りて、従来の心を廻えして、本願をたのみたてまつるようになったのを廻心とは申すのである。

第十七章

辺地の往生をとぐるひとついには地獄におつべしということ。

自力念仏を称えて化土の往生を遂ぐるひとは遂には地獄

に落つるという異義である。

蓋し是れ不徹底なる信仰を嫌貶するの余り遂に地獄に堕すべしとまで極限するに至りしなり。如何にも自力念仏に止まりて仏智不思議を信ぜざるは大に誡むべしと雖も、如来は如来を疑うものをも斥けたまわずして遂に果遂の願を以て真如門に転入せしめたまうなり。然るに化土の往生を遂ぐる人は地獄に堕すべしというは誣うるも亦甚しというべし。蓋し是れ念仏はまことに地獄に落つる業なりとの言をなしたるは此の思想より来たりたるなるべし。（悪は往生の業なりとの邪説と同一主張なるべし）又此と正反対の思想が念仏は善なり。浄土に生るる業なりとの言をなしたるなるべし。蓋し第二章に「念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。」とは此の両思想を非認したるものなるべし。

第十八章

まず仏に大小の分量をさだめんことあるべからずそうろう。かの安養浄土の教主の御身量をとかれてそうろうもそれは方便法身のかたちなり。法性のさとりをひらいて長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもてか大小をさだむべきや。

先ず浄土に往生して成仏する境界即ち無上仏に大小の分量をさだめるということがあるべきでない。全体かの安養浄土の教主阿弥陀如来の御身の有様が説かれてあるが、それは衆生済度の御身（為物身）既ち方便法身の御姿である。しかるに我等が安養浄土に到りて証する無上仏の境界は方便法身の現じたまいし本源たる法性法身（即ち実相身）であって、法性真如の本覚の境界に目覚めて見れば長短方円の形もなく青黄赤白黒の色もなければ何を標準として大小を定むることが出来ようか。

結文

大小の証文ども少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにしてこの書にそえまいらせそうろうなり。

大切なる証拠となるべき文即ち聖人直々の御話しになりたる御言を少々抜き出したてまつりて標準とするように此の書に添えておきました。

是畢竟前九章を指すものなるべし。而して聖教の権実真仮を区別して権を捨てて実をとり、仮をさしおきて真を浄土真実教行証文類と題したまう所以なり。而して歎異鈔前九章は此聖人の御本意に従って直々聖人の御言を記憶のまま抜き出したるものなれば、実に歎異鈔前九章

は聖人直話の簡潔なる『教行信証』とも謂つべし。宜なる哉歎異鈔を熟読するとき教行信証の蘊奥髣髴として眼前にさえぎるの感あること。予は歎異鈔を通じて教行信証の真意を発輝感得せしこと幾許なるかを知らざるなり。猶此に注意すべきことあり。古来前九章と後九章とを以て恰も大学の経と伝との如しという。如何にも前九章は聖人の御言にして後九章は歎異鈔著者の言なりという点は酷だ肖たるものなれど同時に大に混同すべからざることは大学の経と伝との如く前九章を釈する為に後の九章を書きたるにはあらず。寧ろ歎異鈔と題せらるるまでに此書の本領は後九章にあり。而して其の異義を正すに標準として前九章を挙げたるものなり。而して歎異鈔の著者は頗る明晰徹底せる書き振りをなせるものにして後九章を根本として之が標準として前九章を返照せば、各章相応して脈略貫通せること痛快極りなかるべし。読者心して熟読自得せらるべし。

第十一章の標準……第一章
第十二章の標準……第二章
第十三章の標準……第三章
第十四章の標準……第四章
第十五章の標準……第五章
第十六章の標準……第六章
第十七章の標準……第七章
第十八章の標準……第八章

第十章は異義の条々を挙ぐる徴票にして、恰も冠頭のはしがきの如く第九章は聖人直話の総結にして後九章の後尾に於ける結文に似たり。実に歎異鈔の前九章と後九章は合掌して両手指々相合する如し。

煩悩具足の凡夫火宅無仏の世界はよろずのこと、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそおおせはそうらいしか。

煩悩を具足したる凡夫火宅の如き無常の世界は、万事、何から何まで虚事戯事ばかりで一つとして真実あることなき世の中に、此の虚仮不実を飽くまで御見捨なき御慈悲の念仏ばかりが真実にてあらせられると親鸞聖人が仰せられた。

後鳥羽院の御宇法然聖人他力本願念仏宗を興行す云々。

此の文は一本によりて附加せるものなれど恰も『教行信証』に於ける後序の如く聖人流罪の事実を書きたるものにして聖人信念の具体的実現なり。歎異鈔の真信を体現したまえるものとして仰ぐべし、信ずべし。

愛書と求道

「清沢先生信仰坐談」

福島政雄

日本仏教の最も光輝ある時代といえば、もちろん鎌倉時代であって、法然、親鸞、道元、日蓮などの諸高僧の書き残されたものは何れも求道の指針となるものであるが、今は近く明治時代の仏教書から私が受けた感銘を書いて見たいと思っている。

明治時代の仏教と言えば不振ということが先ず考えられるであろう。明治維新の廃仏棄釈の後をうけて仏教は影をひそめたと考えられるであろう。しかし事実はむしろその反対であった。徳川時代に仏教は国教であるかのように取扱われて大切にされたが、そのために形式的に栄えたようであるけれども、精神的には全く不振であったのである。これに反して明治維新の廃仏棄釈は、かえって仏教精神に奮起する人々を出現せしめている。その人々の数は多くない。しかし真剣な人々が出現した。清沢満之師の如きは正にその一人であると言って宜しいであろう。

清沢師は文久三年の生れで、明治三十六年に四十一歳で世を去った人である。私はその生前に親しく接することは出来なかった。私が清沢師を最初に知ったのは「清沢先生信仰坐談」を通じてである。著者は安藤州一氏であり、清沢門下の漢学者である。漢学者であるからその文章は大分漢文体であって、今日の青年にはむつかしいかも知れないが、併し美しい名文である。

先生の幽居は浩々洞と名づけられき、余が先生に侍するの日は実に東京本郷区東片町百三十六番地の居を以て浩々洞と称したりき。洞の門には山茶花の花こぼれ、掃えども掃えども紅白の花片はつねに籬辺に横たわれり。疎々の修竹は数本の梧桐と相並びて奥庭の一隅に立ち、秋気すでに動くと雖も、残暑尚威をたくましゅうするの日は、幾度か我をして「階前 修竹時 揺影、唯是清風 不到人」の歎を起さしめき。

このような住居で清沢師はその門弟を育てられたのである日曜毎に講話をして、当時の物質主義に反し精神主義をと

なえられた。その門弟中で後に仏教界の優秀人となった多田鼎、佐々木月樵、暁鳥敏などの人々があった。

一夜月明かにして竹間涼露を滴する頃、先生縁端に侍して雑談数時を経たりき。時に余、先生に向って曰く、生は八、九歳の頃家庭に父母の膝下に在て晩食を終ゆるの後、竹籬の涼風を浴びつつ、父が話す所の赤壁の戦、川中島の戦、楠公父子の桜井駅の別離などを聞きし頃が生の半生中、最快の時なりき。知らず先生の快時は何時の頃にありしやと。

先生曰く、余は従前は思いぬ、帝国大学の寄宿舎時代最も快なりしと、されど今日はしか思わざるなり、唯如来慈光の下に現在最も楽しきを覚ゆ、これ如来に由て現在安住を得たるものの徳なり、と。

この境地は現在の私にはよくわかるように思う。若かった頃の私にはなかなか思いも及ばなかったことと思う。師は次のような教をも垂れている。

指頭を以て圧する時深く凹む球は必ず破れず、捲土重来の時、勢力亦頗る大なり。爾等護謨球の如くなれ。誹らるる時静かに待て。笑わるる時静かに待て。圧せらるる時深く凹め。しかも圧力去るの時猛然として邁進すべきなり。

師の晩年はまことに悲痛であった。しかも師はその信仰によって静かに安住する人であった。

今や長男十歳にして今年六月五日病んで没し、荆妻亦病んで余命久しからざるを知る。取り越し苦労の無益にして人生の恃む可からざるや此の如し。是を以て如来による者は現在安住の思念に住し、如何なる窮路にも如来は必ず活路を与えたまうことを信じて、過去罪悪の追求をやめ、取り越し苦労を離れ、如来慈光の下に昌平の生活を進めざる可らずと。

師の机上に在った書籍の主要なものはエピクテタスと阿含経と香月院の歎異抄講義であったという。このエピクテタスは師が常に引用せられているのであり「死の門戸は常に開いて居る、死なんと思えば何時でも死ぬることが出来る何も自ら死を急ぐ必要はない」と言われている。またソクラテスを常に引用して居られる。このような点から見れば師は理知の人であったように思われる。

しかしこの事については師の直弟子の一人である曽我量深師から聞いたことがある。「清沢先生を理知の人と思っている人もあるようであるが、自分は先生から直接に聞いたことがある。先生は御自分を理知の人ではないと言われ感情に流れ易いので努めて理知的の書物を読んでいると言われた」と。

死の問題は師にとっては第一の問題であった。次のような

ことがある。

死の問題の解決を得ずして現在の苦悶を排除せんとするは不可能なことなり。予は試みに世に向って問わん。君は何故にさほどパン問題のために悩まさるるや。彼答えて曰わん。パンなくては餓死を免れざるが故なりと。予は更に問うて言わん、侮辱せらるれば何が故に苦しきや。彼答えて曰わん、侮辱せられては自己の品位を損するなり。品位を損すれば何が故に苦しきや。曰く人に軽んぜらるるが故なり。人に軽んぜらるれば何が故に苦しきや。曰く自己現在の地位を失うが故なり。現在の地位を失えば何が故に苦しきや。曰く月給を失うが故なり。月給を失えば何が故に苦しきや。曰くパンに窮して餓死を免がれざるが故なりと。

此の如く世間現在の憂苦を根底より審査し来れば皆死の問題に到着す。されば是等種々の煩悶を一掃せんとせば先ず死の問題を解決せざるべからず。死を恐れざるの人に向っては、商売の損失何かあらん、他人の誹謗何かあらん。侮辱と破産と、別離と疾病と、我において何かあらんや。百計千慮尽き果てたる時が、かねて自己の覚悟し置きたる死に到着するのみ、されば古来の高僧偉人が先ず第一に死の問題を解決するは是がためなり。エピクテタスが、死の門戸は常に開いて居る、余は何時にても死することを得ると言うは、人生すべての煩悶について最後の解決をなせるものなり。世の人、宗教家が死の問題を説くを聞きて、現在苦悶の解決法を説かざるが如く思う者は大なる誤りなり。

これは実に哲人の境界である。このように説かれる清沢師は、ただ理知の眼をもって人生を達観し、俗人の境地をはるかに超越して居られるように思われるが、実は決してそうではない。もっとも若かった時の師は理知の方がよくはたらいたかも知れない。その母堂を亡くされた時に、僧侶の弔詞に対してかえって反感を起し、死の問題を解決すべしと人に向って教ゆる僧侶が予に対して悲歎の情察するに余りありと言うのは、その意中を解することが出来ない不快の感に打たれたと言われたそうであるが、それは親の死に際して心の乱れもあり、併し余裕もあって理知的なことを言われたのであろう。

併し長男を亡くされた時には「今回の弔詞に対する余の感想は人情の濃かなる点が心絃上にひびくを覚える」と言われたというから、師は元来は理知の勝った一面もあって、感情の方から言えば少しく極端な言を吐かれたこともあろうが、子供の死に際しては親の場合とちがってその場の痛切な悲しみを慰められたことに深く感ぜられたのであろう次のようなこともある。

余（安藤氏）卒爾として先生に謂て曰く、生、今日、「日本新聞」を閲するに、中に「病床日記」とて根岸の俳人子規の病中の感を記せるものあり。子は久しく病床に在りて、しかも従容として吟哦を事とす。その言辞多く肺肝より出ず。生、今日読む所のもの頗る興味多し。曰く「余は従来、宗教上の悟りなるものを誤り居たり。昔は則ち以為らく、如何なる時においても平気に死することを得る、是れ則ち悟道の真意なりと。されど今にして昨日の非なるを知る。如何なる困難の苦境にも平気に活くることを得る、是れ則ち悟道の真意なり」と。先生以て如何となす。

先生莞爾として掌を撫して曰く、この語あるかな、この語あるかな、真に是れ悟道紘上の響きなり、と。その後幾ばくもなく、子規子病革まり、根岸の里に没す。暁鳥敏、詩契の故をもって往いて田端の里に葬りに会す。清沢師の真面目はここにも現れていると思う。死の問題の解決は如何なる困難の苦境にも平気に生きることを得るということにあるというのである。

以上安藤州一氏の「清沢先生信仰坐談」から私の感じた数点を抜き出して師の面目の片鱗を明かにしようとした。清沢師のことはこれにて尽きるのではない。次回には更に他の面から師のことを伝えて見たいと思う。

（昭和四十年六月十一日　稿了）

信仰坐談

安藤　州一

余かって清沢先生の前に余の信念を表白す。先生曰く。汝の信仰は今後なお一変するの時来るべし。それ信仰は如何なる理窟に遇うも如何なる異説を提示せらるるも円転滑脱、毫厘も動揺なきの境に至らざれば真の確立を得難きなり。一方の説を峻拒して、他の一方の説にのみ依頼する信仰は恐らくは他日の変動をまぬがれざるべし。余はエピクテタスの主義に従う、しかも他力本願の信仰は動かざるなり。余はソクラテスを尊信す、しかも如来の救済を疑わざるなり。余はキリストの山上の聖訓を喜ぶ、しかも大悲の誓約の誤らざることを信ず、と。

○

余一夜先生に問うて曰く。先生の信ずる如来は自然の理法宇宙の公理の如きものにして単の空理に過ぎずと言う者あり、果して然るかと。先生曰く、それ如来には法性法身あり方便法身あり応身あり化身あり報身あり、円満不可思議の如来は一言に尽くすべからざるなり。一言に尽くし得べきは如来に非るなり、と。

かぎりなきみ仏の慈悲

和才誠司

人は自信を持たねばならぬ、されど自惚れてはならぬと人から云い聞かされ、又私自身も斯様に思つている。自信と自惚れ、言葉はすこぶる簡単明瞭であるが、さてこといやしくも私自身の事になるとわからなく成つて来る。第三者の立場にて他人を批判する時は、彼は自信を持つている否自惚れていると、容易に判断するが、私自身の事になると、なかなか判断が下せぬ。

例えば、私は今謡曲を習つているが、謡曲仲間はご多分にもれず、何れ劣らぬ天狗揃い。私もその一人である。先生の前に出て稽古する時は、始終直されるから頭が上らずちぢかんでいるが、先生が去り、弟子だけの稽古となると忽ち天狗の本性を発揮し、私が地頭になる、いや私が『シテ』をやると争い、先刻師の前にての緊張さは何処へやら実にあさましきかぎり。師が前に居ると居ないとで心境が百八十度転換する。謡う私自身としては如何なる場合にても自己の全能を発揮し、私なりの自信を持つて謡つて居るが、第三者はこれを眺めて自信と認めず、自惚れと云う、結局問屋が卸さぬのである。

謡曲に自信を得るためには、師匠に就き練習に継ぐ練習を積み重ね、この道一筋に一生を賭けて精進するのみである。これでもう謡えるからとて師匠から離れると、その人はその時が芸道の頂上にて、その後は下り坂であると、この道で云われているが、まさに至言であろう。厳密に云えば謡曲の家元名人と雖も本当の絶対の自信はあり得ないかも知れぬ、今生に於いて完成することの出来ぬ芸道のきびしさをしみじみ痛感させられる。

信仰と謡曲とは直接関係ないが、私は謡曲を通じて信仰の喜びをかく味わつている。

謡曲は単に謡うだけの簡単なことであるが、それでさえ謡曲に自信を得るためには、師匠につき生涯を賭け、如何に努力しても目的を達成することは不可能である。私の力の如何に微弱なるかを切実に感ずる。私の無智無能を省み

る時、宇宙の真理、生死の大問題を解決する信仰につき、私がこれを思議し研究する資格の全然無いことは、今更考えるまでもない、動かすことの出来ぬ現実である。私の身の程は愚痴蒙昧の結晶であるから、覚者の声を聴き、その教を仰ぐ外ない。

祖師親鸞聖人が『親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり』(歎異鈔二章)と仰せられたが、実にその通りでこれ以外に私の辿るべき道がない。

信仰は『弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつこころのおこるときすなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり』(歎異鈔一章)と親鸞聖人が仰せられた通り、信の一念にて往生が決定し、その後の生活はすべて仏恩報謝である。阿弥陀仏より与えられた不可称、不可説、不可思議の大善大功徳を讃歎するのであるから命のあるかぎり何程喜びても喜び尽くせぬ。

謡曲もこれと同じく芸道のきびしさは如何に努力しても今生に於いてその奥技をきわめつくすことの出来ぬところに芸道の尊さがある。

信仰も謡曲も共に等しく、生涯を賭けて、勇往邁進するのみである。

自信と自惚れとは。言葉は違つているが、此所に到り、これを詮議する必要はすでにない。

私の謡曲は謡いかたがよいとか拙いとかの問題でなく、ただ謡つて居さえすれば楽しくて事は充分足りる。

元来、自信と自惚れとは、分離することの出来ぬ、一体不可分の因果関係にあるものにて、自信より自惚れを生み自惚れより自信を生む。恰も鶏と卵との関係の如く、分けることが出来ない。世間に鶏が先に生れたのか、卵が先に生れたかとの議論があるが、生物が宇宙の間に生成発展する過程において、因果の理より、或いは卵となり或は鶏となつて今日にいたり、卵の中に鳥となる素質を、鳥の身体の中に卵となる素質をすでに含んでいる。単に目前の現象をのみ見て、その生れて来たる前后を論ずるは愚なことである。

重い飛行機が空中に上昇するのは、空気の抵抗力に因るのである。飛行と同時に推進力が出て、抵抗力と一体となり大空高く自由自在に飛翔する。抵抗力と推進力、全く矛盾するものが一体となつて偉大な働きをする。

阿弥陀仏の慈悲と、私の煩悩と、全く反対なものを機法一体に成就せられた南無阿弥陀仏を、機と法と二体に分けると全く意義がない。機法が飽くまで一体のところに絶対他力の妙味、信仰の生命がある。

分けることの出来ないもの、分かつべからざるものは、私のあさはかな計らいにて無理に分けず、そのままの特性を味わうがよい。

謡曲には音調、節廻し、緩急、間どりなどあり、これらを正しく謡うことによつて、はじめて謡曲の醍醐味が出てくる。我流に無茶苦茶に謡つては、何程謡つても楽しみも湧かず進歩もない。

信仰もこれと同じく、正信、迷信いろいろあるが、正しき信仰を正しく信ずる、即ち間違いなきお助けを間違いないと信ずるところに、法の妙味が湧いて出る。法は私の作りたるもの、私の仕上げたるものにあらず、仏の作りたまう法、仏の仕上げたまうお助けに安心するのである。私の思慮分別をさしはさんでは何程聴聞しても法味が出てこない。

元来私は法義を楽しむような人柄、性質でなく、法義より金が好きである。仏法嫌いである。然るに仏が法義を楽しまねばならぬように、楽しまずに居られぬように、味をつけてある。歎異鈔に「天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり」と、示されてある。喜べぬ私が、喜こべるように仕上げてある仏のかぎりなき慈悲、親心が何よりありがたい。

謡曲は礼儀作法が厳しい、謡う時は必ず正坐して姿勢を正し、和服ならば男女とも羽織を脱ぎ、男は袴を着用する。

元来謡は気分にまかせ、時と所とを問わず謡うのが習慣であるが、謡曲を床の中で謡つては謡曲の気分が出ぬ。作法を重んずる処に謡曲の味わい、品位があるのであろう。作法の効果いちじるしきを思う。

権利義務を主張する相対五分五分の人間世界は、礼儀作法によりて相互間の秩序協調が保たれるのであるから、礼儀作法が必要である。

然るに絶対の慈悲阿弥陀仏と、極悪深重の私との関係は全く比較にならぬ。強いてこれを世の中に求めれば、母親と赤ん坊との間柄よりなお甚だしき相違である。赤ん坊は腹が空き、或は寒暑を覚える時だけ母を求め、その間大小便の出し放し、親に対し礼儀作法など微塵もない。

私もこれと同様、縁に触れ仏を思い出した時、困つた時だけ、仕事を営みながら、床の中に休みながら、念仏の真似事をしている。かく時と処とを問わず、礼儀作法を抜きにして念仏が出て喜べるのは、仏が絶えず常に私を見ていて下さる証拠であろう、実に勿体ない。

私は礼儀作法を否定し、或は軽視するのではないが、仏と私との間に、所謂他人行儀を離れ、親子水入らずの、絶対の慈悲が通じて居るのがかぎりなく嬉しく、尊く、心強

く。ありがたい。

信仰は煩悩具足の私が、弥陀の誓願不思議を信ずるだけで、唯お慈悲を頂くだけで、すべての悩みが自然に解決させられる。私の罪悪は問題でない。

謡曲は未熟な私が、唯謡うだけで楽しく面白く、健康によろしく、その目的を充分に達することが出来る。私の謡い方の巧拙は問題でない。

謡曲の興味は、私の努力に比例する、自力であるが、信仰の味は、全く他力である。仏法嫌いの私を、仏を信ぜねばならぬように私を育て上げて下された仏のかぎりない大慈悲が肝に銘ぜられ、仏徳を讃仰するばかりである。

真宗の法は抽象的に、概念的に知られるのでない。具体的に自分の身に降りかかつて来た実際問題を通じて知らされる。

私は陋屋に蟄居し、お慈悲ひとつに生き甲斐を覚え、時には謡曲もうたい、その日その日を生かされて行く。

人の世に　お慈悲の外に　人の世を
楽しく生くる　道はあるまじ

パスカルの言葉

自己心を中心として、どういう醜態が演ぜられるか、観察してみよう。

人間が人から愛されたり、尊敬されたりすることを願うのは利己的な天性にもとずく。しかし人間は自己の偉大を誇ろうとすれば、自己の弱小が目にとまる。長所を誇ろうとすれば、短所が目につく。そして自分の欠点を認めることくらい不愉快なものはない。まして他人から自分の欠点を指摘されるに至つては不快この上ないことである。

それ故、人間は自他を欺こうとして自分の欠点を隠したり偽装したりするのである。その結果、真実を忌み、真実を言うものがあればこの人を憎むに至る。

これと反対に阿附する人は歓迎され、忠言を試みるものは敬遠される。小人はこうした心理の機微を利用して、勢力者に巧言する。勢力者にとつて鼻息をうかがわれることぐらい愉快なものはない、だから小人を近づけて忠諫の士を斥けるそして小人に取り巻かれて、その巧言令色にうぬぼれる結果、遂に明識を失つて愚人となる。

要するに人間は互にだまし合つて、自利を貪るものに他ならぬという結論に到達する。

信味断片

佐藤強三郎

助かるということ

歎異鈔一章に、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんと、おもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」

とある。

「たすかる」とは、思いがけなきお方の深いお心をきき、その御心に感じ、謹しんで罪業に服す事である。衷心より悦んで服し、何時にても死刑に順う心構が出来ることである。これ信順より自然に出ずる意外の出来ごとである。予想せざる、思議せざる出来事である。実に一生における一大事である。

自分がいつまでもいつまでも悪事がやまず、我慢のやまぬを御覧になり、それをかねてしろしめして……それはお前の性分で、どうしても止まぬとは困つた事である。困つても止まぬ、可哀想なものである……と陰になり、日向になり、それを心にとめて、あわれんで下さる。この不思議のお方の深いお心をきくことである。これはまことに意外のことである。頼まれもせぬのに、他人の癖を心配してくれる方は奇妙な人である、普通には無いはずである。

助けるとは私の煩悩を何でも満足させて下さることでない病気が思い通り治ることでもない、死なないことでもない事業に成功して金持ちになることでもない、智識が得られて立派な学者になることでもない。

真実の信心とは、今まで知らさりし大覚の智慧の光明に照らされ、無辺の慈悲をこうむり、その御方の前に心から頭を下げ、はじめて自分の暗黒と罪悪の深いことを知らされ今まで、おのが善をほこり、おのが悪に泣く者が、廻心懺悔して安心することである。

これが感恩の基となり、平和と秩序の源泉となり、これに

よつて道徳も樹立せられるのである。かくて人を離れて絶対慈悲の一仏に帰依するにいたる。

まさにこの結果は一心一向たらざるを得ない、それは水が高きより低きに流れる如く自然である。一仏に一心に帰依して念仏申す。そのままが　無碍の大道に自然に通達させられる。

×××　　×××

山に入る者は、山を出ず。人生より信仰に入り、やがて自然にこの斗争劇甚の世に生活して、信念を建現するであろう。

助からぬものをこそ

近角先生著、慈光録の中に、「父の示寂によりて教えられた真実証の霊境」の中に、

「父上、病ますます劇し、児父上に向つて曰く『助けて下さるのが有難いな』と。

父上、今はすでに舌剛うして弁ずべからず。されど猶『助からぬものを』と冠せたまう。児おぼえず声を放ちて感泣す。嗚呼この一語、大慈の極致、救済、至極なり。……」

御父、常随法師が臨終に

『助からぬものを』と申された、この事は、この一言、死ぬまで凡愚たることの自覚と、如来大慈の鴻恩をよろこばれたる感謝の披歴であると思う。

信心をいただけば、如来とひとしいとか、言つて、いつの間にか、良い気になつてしまい。自分は当然助けらるべき人間であると、高慢になることは、自分の凡愚たることを忘れるからである。

死の最後までも

「助からぬものを、助けて下さる」とは、実に思いがけぬ御慈悲であるとの御述懐であろう。

聖人の御晩年の悲歎述懐和讃に、

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
外儀のすがたはひとごとに　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪偽おおきゆえ　奸詐ももはし身にみてり
悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに　虚仮の行とぞなずけたる。

は、あくまでも「助からぬものを」悲歎された和讃である。そこに「弥陀の廻向の御名」がましまし、「如来の願船います」のである。

不倒の安心

一度極重悪人を呆れたまわざる無量の慈光にあい奉れば

人生如何なる業報を受けるやもはかり難いが、永世不倒の摂取の願力におさめられるのである。

実に信仰とは、将来に希望を失わぬことである。希望とは、人生に真実あることを信じ、如何なる悪をも見捨てざる慈悲あることを仰ぐことである。しかもただ生命のある間のみならず、命終の後もなおかつ安楽国にいたるの無窮の希望がある。

浄土に生れる資格のない、地獄を一定すみかとする者にそれを、どこまでも呆れない、見捨てない。同乗、同行、運命を共にするぞ、との御親切に腹ふくれてみれば、もとより地獄必定のわれ、ただ仏願に順じて、この上は地獄なりと極楽なりといずれなりと、願力にまかせたてまつらんのみ。

み仏をたたえて

水谷美津子

悪を知つたのが嬉しいと云つたらおかしいでしようか？
でもそのためにあんなにも深い、御仏の慈悲を知ることができたのですもの
これ以上のよろこびがあるでしようか！

自分には悪が無いと思いこんでいた昔、
私は天に向つていつも不足を云つていた。
天はいつもやさしく私のぐちを聞いていてくれたが
それでも満足出来なかつた私！

何を云う資格もなくなつて
やつと知らされた、つきない御仏の慈悲の深さ
悪は悪いことでしようか？
悪い事でしようね、きつと悪いに違いありません
でもどうしようもなかつたのです、
そのどうにも出来ない私を引き揚げられた嬉しさ！

ただ、ただ、念仏申して生きるより他の生き方を知らないのです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

教えられることども

花田正夫

子と親、親と子

子は親に対して何処までも対立して一つになることは不可能であります。聖人が「親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」と御述懐なされたのは、それがよいとかわるいということでなしに晩年に達せられた聖人が御自ら歩まれた足跡を振りかえられてそのままに吐露された慚愧の言葉であります。

池山先生は意訳歎異鈔の序文に

「母に対して何一つ孝行らしいことをしたことのない私にも、平生歎異鈔を一緒に読んだということだけは唯一の快い思出である。今になお歎異鈔を読む時には母がそばに居られるような気持がする。しかし断つておくが、今日は一つ母の為に読んで聞かせてあげようというしおらしい考から読んだことは一遍もない。ただ自分が読むついでにきかせたというまでのものであつた」

とある。私自身のことを申して恐縮でありますが、私は母に対して火鉢あつかい以外の態度はとれませんでした。火鉢は冬は座敷の真中に出しますが、夏は物置に投げ込みますように、自分の身勝手を中心として、母の七十五才の死の床にまでそうした振舞から出られませんでした。

子は親に対して二にして二に終る外に一分一厘も出られません、まことに終始一貫我儘勝手で終りました。

だのに、親は子に向つて、二にして一、一にして二、になつて下さる。

子は親から生れて、而も親から離れて行きますが、離れ去るもの、逆らう者に何処までも、一味になつてそそいで下さる心、よしあしこえて御一緒下さる、古歌に

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ
親の身すててかえる子のため

とあります姥捨山の親のこころこそ、思いもかけぬ広大なまことであります。身は捨てられつつも捨てる子のために枝折りせずにいられないこころこそ、如何なる障害にあつても、それをこえてほとばしる子と一体化して下さるまことであります。

しかも私自身にとつて云えば、それは花田梅次郎と花田たくという二人以外にない、世界に幾億の母があり幾億の父があつても、私と一体化してはもらえないのであります。

そのように、煩悩具足の私、無明の暗夜にさ迷う私にとりましては、無数の神々や菩薩方や諸仏がましましても、凡夫と名のつく私に何処までも一体化して下さる方は、阿弥陀仏一仏であります、南無阿弥陀仏。

自然のひくところ

歎異鈔二章に

「身命をかえりみずしてたずねきたらしめたまうおんこころざし、ひとえに往生極楽の道をといきかんがためなり云々」

とあります。何度も何度もこの御文を誦していましたが或時フト、関東の同行方は聖人にお別れして二十年もすぎたのに、身にふりかかる危険をもかえりみないで聞法の旅をしていられるが、さて私自身の現在の心はどうであるか？と反問して、呆然としました。

朝から晩まで、寸時のやすみなしに自分の煩悩満足だけにかまけはてていて、仏にも法にも何時もうしろむきでおります身にひきかえ、この関東の同行方は私にはとてもついて行けない、と限りない淋しさにおちました。それからのちになつて、この一段を何度も何度も口ずさんでいますうちに、アアソウカと大いにうなずかされましたことは、おたずねする同行よりも、同行をひきつけられる聖人の吸引力の偉大さという点に一たび心を向けました時であります。世上一切の交わりは、遠ざかればうとんじ、離れれば忘れて行く、どんなに親しい友も、どんなに悲しかつたことも、時の流れに洗われて消えて行くのが常であり、鉄則であります。この鉄則を破つて、遠ざかれば遠ざかるほどいよいよ親しくその光を増して浮ぶのは親であります。その地上の親と等しく聖人こそはこの時流を逆行して下さる唯一の方であります。そこに聖人とお別れ申して幾星霜ののちに、いよいよ聖人の信徳にひかれて自然に身命をかえりみぬ聞法の旅姿が関東の同行にあらわれたのであります。

そこになると、関東の同行も私共も同じ立場におかれるのであります。私自身二十四歳の秋、聖人の仰せが身にしんで、心身共にひきつけられてこのかた六十三歳の今日まで念仏の一筋道を照る日も曇る日もたどらせて頂けるのも聖人に導かれて蒙る如来の吸引力自然のはたらきであります。関東の同行にまじつて聖人の御前に坐らせて頂き、み声に聞き入らせて頂くことであります。

それにつけましても、聖教をうわすべりに分つたつもり

でくりかえして読みすごしていることのどんなに多いことかと愧じ入るばかりであります。

宗教は万人に必要である

九州で信の人として、眼科医を開業していられた安波勲八先生が、宗教は万人に必要であることを、

「近視や乱視はレンズによつて調整出来るが、錯覚は病気ではなく万人がのがれられないものである、この錯覚をやめよと言われてもそれは不可能である、かといつてそのままでは正しい視方は出来ない。

このどうしようもない、万人の持つ錯覚を知つて、この錯覚を持つ者に美を感ぜしめるために古代ギリシヤにパルテノンの建築美が出来、今なお人々を驚かしている。同時に万人残らず心の錯覚があつて正しく物を見ることが出来ない。それではいけない、正しく見ねばならぬし見たいのであるが、それが出来ない。その矛盾をもつ我々に、それを責めず、そこから逃がれ得ない性分を知悉して、そこに飽くまで同情して下さるのが仏心の真実である。そのおまことによつて錯感を持つている者が、錯感をもつたまんま安心立命を得るのである」（信仰体験録）と述べられている。

池山先生は或時、

「仏の本願は、あらゆる人々にエネルギーを無限に供給される。」

と語られたことがあります。善人も悪人も、老人も青年も煩悩具足の凡夫である限り「生死の苦海はほとりがなく続く」のであります、その者に無量無辺のエネルギーを供給して下さる方が阿弥陀仏であります。そこに死刑囚も、その断を下す官吏も、本願をきき念仏申させて頂くことによつて、安んじて死に、安んじてそれを看護ることが出来るのであります。

信友、故・林田英夫さんが、胃ガンで母堂が亡くなられた時、「医師でありながらよくすることの出来ないことは残念であるが、医学にも限界がある。こうした母との死別の時、逝く母も念仏の中で御恩を仰ぎ、見送る子の自分もお念仏に光を頂きながら別れることが出来た。ありがたいことである」としみじみと語つてくれました。そこに逝く者も、送る者も、念仏にたすけられて行く事の出来た血のにじむ体験談を聞き、万人にそそがれる本願のエネルギーの偉大さを驚喜させられました。

ゲエテはその著ファストの中に

「無力ではあるが不滅の願いとしてよくなりたいと念ずる」

と述べておりますが、よくなりたいとの万人の願いがあ

りながら何時も悪にばかり負けて、末通らない我等、しかもその願いを消し捨てることの出来ぬ者の救いは、錯覚を持つ者を全理解して建築されたパルテノンの建築美と同様に、如来の本願力ひとつであります。

我等の煩悩具足の身をかえりみ、心の錯覚を如何とも為し得ず、よくなりたい願いを持ちながら無力で常に悪にまけて行く身には、宗教は万人になくつてはならぬということをいよいよ知らされます

長安一片月　　長安一片の月
萬戸擣衣声　　萬戸衣を擣つの声
（李白）

如来の喚び声

喚び声が力なりけり旅の空
雨降らばふれ　風吹かばふけ

とよくいわれますが、「喚び声」とは「弥陀仏の仰せ」であります。善導大師は二河譬をとかれて

西岸上に人あつて喚んで言わく

「汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に堕することを畏れざれ！」

と。蓮如上人は御文に（四帖目九通）

「阿弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫、罪業の吾等たらん者、罪はいかほど深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救うべし」

と仰せられてあります。

今よくよく考えますのに、大無量寿経を説かれた時の釈尊は、大寂定に入られて、御顔は巍々としてかがやき、御心は三世の諸仏と相念じあわれる中に出世本懐をのべられました。そこには釈迦仏がそのまんま弥陀仏となられ、弥陀仏は釈迦仏と建現していられるのを拝します。

この善導大師と蓮如上人の御勧めは、両聖が弥陀仏の御心にとけこまれての金言であります。仏・法・僧の三宝一体の尊容にふれるのであります。そこに生死はてしのない苦海にあつて、如来の御声を聞かせて頂くことが出来るのであります。

蓮如上人は「御聞書」の中に、御文の外に聖教があるのでない、御文はそのまま如来の御掟である、と語られているのも、上人が我等の眼の前に、如来の仰せをそのまま直指していられるのに、それをそれとも気がつかないで、その外に救いを求めてうろつくことをいましめられたものであります。

× × ×

あとがき

仏陀降誕の花祭りがまいりました。

大和島根にさき出でし　花のさまざま
つみそえて
今し粧飾える花御堂　立たす仏の尊さ
よ、
あわれ三千年往昔に　天と地とを指ざ
して
我ぞこの世を救うべき　尊き聖と生れ
ましぬ
時節は春なり地は王土　此処に御教い
や栄え
花もわらいて鳥うたう　今日の御祭り
みな祝え

と老小男女をとわず、仏徳をたたえつつ誕生仏の前にぬかずきむつぶことは、美しくも尊い集いであります。

○

「歎異鈔の枝折」の近角先生の原稿は池山先生の意訳歎異鈔の跋文として発表せられたものでありますが、心して本鈔を読む者に、その迷い易い岐路や難解のところどころに御懇切に明快に御指示下さったものであります是非心にとめて読まして頂きたいものであります。

「愛書と求道」は福島先生が「人間と真理」誌に発表せられましたものから頂きました。ことに清沢先生の信念の大切なお味わいについておのべ下さっています。

「かぎりなきみ仏の慈悲」は和才翁が、いよいよ八旬に達しられての信証であります。身辺の万事の中に信味を発見せられての日日、そのお生活の態度に、教えられますことが多いのであります。

「信味断片」は佐藤様御存命中に頂いておりました原稿からことに私の心にのこるもの二、三を掲げさせていただきました。すでに亡き佐藤様の面影がしきりに去来してまいります原稿であります。

死に様はよし如何あらんとも凡夫われ
ただみほとけのちかいにまかせて

とかつて詠じられたことも自然に思い併せられますことであります。

御案内

○五月、六月、七月の第一日曜は休みます。（津市大谷町彰見寺出張のため）

第二、第三日曜午后一時、一道会例会。

○六月三日午后六時半、福島政雄先生観無量寿経講話。一道会館にて。

○毎月二十四日午前、午后、昭和区小桜町、教西寺法話会。

市電御器所通り下車、桜花学園の東。

定価　半年　二百円（送共）
　　一年　四百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄

名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十九巻第四号　昭和四十二年四月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可